

新刊書紹介

Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA). Herausgegeben von der Internationalen Marx-Engels-Stiftung Amsterdam. Erste Abteilung: Werke. Artikel. Entwürfe. Band 5: Karl Marx, Friedrich Engels: Deutsche Ideologie. Manuskripte und Drucke. Bearbeitet von Ulrich Pagel, Gerald Hubmann und Christine Weckwerth. Berlin, Boston: De Gruyter Akademie Forschung 2017. 2 Bde. XII, 1893 Seiten. ISBN 978-3-11-048577-6.

新 MEGA 最新刊は総計 1893 頁の『ドイツ・イデオロギー』

ようやく待望の『ドイツ・イデオロギー』に関する全草稿と印刷物を収録する、新 MEGA ^{注*)} 第 I 部門第 5 巻が刊行された。新 MEGA はいずれの巻もテキスト部と学術附属資料部 (Apparat) の 2 部構成で、テキスト部には厳密なテキスト批判に基づく草稿や印刷物の最終テキストが収録され、Apparat にはテキストの解題、成立と伝承、書誌事項記録、異文および編集者訂正一覧、注解、索引が収録される。今回刊行された新 MEGA 本巻のテキスト部は 709 頁、附属資料部はその 1.5 倍を超える 1184 頁、総計 1893 頁と既刊巻のなかでもページ数、特に Apparat は群を抜いて浩瀚な巻の 1 つである。

新 MEGA の編集体制が刷新されたのはベルリンの壁が崩壊した翌年の 1990 年であった。以降、新 MEGA の編集公刊の責任は、旧ソ連および旧東独のマルクス=レーニン主義研究所から、アムステルダム・社会史国際研究所に本部を置く国際マルクス/エンゲルス財団(IMES)に移り、編集実務はベルリンのベルリン=ブランデンブルク科学アカデミー (BBAW) が中心的責務を負っている。新体制の下で新 MEGA 本巻の刊行は 1997 年に予定されていたから、刊行の遅れはちょうど 20 年になる。この間、当時の編集者は 2 人が物故、編集者がすっかり入れ替わるなど、大きな変動があった。Apparat が浩瀚となったのは、編集者の交代に伴う編集方針の変更も関係していたように思われる。

注*) Marx-Engels-Gesamtausgabe, 1975～。全 4 部門、114 巻を予定。第 I 部門は『資本論』を除く既公表の「著作、論文、諸草稿」、第 II 部門は「『資本論』及び準備労作」、第 III 部門は、マルクス/エンゲルス間の、また第三者間との「往復書簡」を収録。第 IV 部門は「抜粋、メモ、欄外書込」を収録。第 II 部門の 15 巻は 2012 年に完結。他の部門の既刊巻は I/1-3,5,7,10-14,18,20-22,24-27,29-32; III/1-13; IV1-9,12,14,26,31,32 である。

新 MEGA 最新刊の内容

新 MEGA 本巻のテキスト部全体に付された編集者のタイトルは「カール・マルクス/フリードリヒ・エンゲルス：ドイツ・イデオロギー。諸草稿及び印刷物」である。編集者は本巻の内容を「青年ヘーゲル派の哲学への批判」、「真正社会主義批判」及び「附録」に区分する。最初の「青年ヘーゲル派の哲学への批判」は、さらに 4 つに細分され、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』全体に対する「序文」(草案)が、次いで順に、マルクス/エンゲルスを著者とする第 1 章「フォイエエルバッハ」、第 2 章「聖ブルーノ」、第 3 章「聖マックス」に関連する草稿 12 点が配置されている。「真正社会主義批判」には関連するマルクス/エンゲルス、モーゼス・ヘスとエンゲルス、エンゲルス単独の草

稿及び印刷物 4 点が編集収録され、「附録」にはマルクスが協力したヘスの、ヘスとエンゲルスとの、マルクス/エンゲルスが協力したローラント・ダニエリスの印刷物や草稿の断片、草稿 3 点が収録されている。

新 MEGA 本巻の解題によれば、これらの 17 点の草稿と 2 点の印刷物は、いずれもマルクス/エンゲルスが、1845 年 10 月半ばから 1847 年の 4 月ないしは 5 月に『ドイツ・イデオロギー』のために起草したか、共同で公表することを目的に作成に関与した。しかしマルクス/エンゲルスの筆になる『ドイツ・イデオロギー』という作品は現存しない。新 MEGA 本巻で編集された草稿及び印刷物は当初はマルクス/エンゲルス及びヘスによって独自の季刊誌を立ち上げ公表が模索されていた。新 MEGA 本巻での草稿、印刷物の配列は、1846 年夏に計画された季刊誌の出版構想に準拠しているという^{注*)}。マルクス/エンゲルスは、この出版企画が挫折した後、季刊誌 2 巻(冊)分の材料を、独立した 2 巻ものの、場合によっては圧縮した 1 巻本で出版することも模索した。しかし検閲の悪化など、諸種の事情から、マルクス/エンゲルスは、1847 年 12 月にはこうした出版企画そのものを最終的に放棄せざるを得なかった、という。

注*) 新 MEGA 本巻「解題」「テキスト整序、編集者例言」(794-799 頁、参照)。なお、「青年ヘーゲル派の哲学への批判」(編集者の中見出し)の第 1 章「フォイエルバッハ」内の草稿配列は、草稿の成熟度や性格(準備作業、清書稿断片、章の書き出し)等を考慮して行ったという。この結果、第 1 章の草稿配列は、草稿執筆順(起筆順)を銘打ち、「フォイエルバッハに関する手稿の束」を先に置き、章の書き出しも清書稿断片と共にこの「束」より後に置いた新 MEGA 先行版(2004 年)と同一ではない。先行版では、巻頭に、ゲゼルシャフトシュピーゲル第 2 巻第 7 冊(1846 年 1 月号)に収録されたマルクスの「ブルーノ・バウアーを駁す」があった。この駁論は、新 MEGA 本巻には収録されていない。新 MEGA 本巻では、第 1 章を構成する草稿群に先立ち、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』全体に対する「序文」(草案)が配されている。この「序文」は、季刊誌企画挫折後の作品で、『ドイツ・イデオロギー』を独自出版するために起草されたものだが、テキストの性格(ジャンル)を考慮してここに配置したという、等々。配列については上掲箇所興味深い記述が続いている。

新 MEGA 最新刊の意義

今回の新 MEGA 本巻の意義は何か。第一義的にはそれは、次のような問題を具体的かつ詳細に、草稿のオリジナルに基づいて自由に — しかも草稿の解読に関する特殊な専門的知識を有さなくとも — 研究できることになったことであろう。(1)ここに収録された全一連の『ドイツ・イデオロギー』の草稿や印刷物は、そもそもどのような経緯で作成されたのか。(2)この計画はどのような事情で挫折することになったのか。(3)その構成・内容はどのように変遷したのか。(4)その性格はそもそもどうであったのか。(5)20 世紀初頭来の研究史にはどのような問題が存在するのか、等々。

新 MEGA 本巻で文字通り初めて公表された草稿は、附録の最後に収録されたローラント・ダニエリスの草稿(ただしオリジナルは既に存在せず、1920 年代に撮影され、モスクワで保管されていたフォトコピーが基礎テキストである)に限定され、他は既に最終テキストの大半が原語で公表されている。しかし今回ほど徹底したテキスト批判が収録

文書に加えられたことはなかった。解題には70頁余が割かれ、「『ドイツ・イデオロギー』草稿の執筆過程」、『ドイツ・イデオロギー』草稿の伝承」,「『ドイツ・イデオロギー』草稿の編集史」,「テキスト整序, 編集者例言」が詳述されている。編集者は当時の論争や収録草稿だけではなく, 新MEGA第III部門第1,2巻に収録された書簡, 特にマルクス/エンゲルスと第三者との往復書簡を活用することで, 独自の季刊誌による草稿公表に向けた二人の取り組みを活写し, 企画がどのように変遷し, 最終的には頓挫するに至ったのか, その際, 企画全体の, また個々の草稿の構成にどのような変更が加えられたのかを詳論している。また収録草稿, 印刷物のそれぞれについて, 独自の成立と伝承, 書誌事項記録が与えられている。なかでも, 当初はブルーノ・パウアー及びマックス・シュティルナー批判として起草され, 後に, 第1章「フォイエルバッハ」の本論部分に転用された草稿部分 — マルクスはこの部分に1-72の頁を振った (3-7頁及び30-35頁は伝承が確認されていない) — の「成立と伝承」には23頁も割かれ, この部分の成立過程は4段階に明瞭に分かれること, その手入れは『ドイツ・イデオロギー』関連草稿の起筆から計画そのものが挫折する全期間に及んでいることを詳しく明らかにしている。加えて, 異文一覧で紹介される本文テキスト成立に伴うテキストの抹消, 加筆, 置換, 記述順序変更の正確な記録は, 総計約500頁に達する膨大なもので, 注解と共に, 旧MEGA第I部門第5巻 (1932年), 新MEGA試作版 (1972年), 新MEGA先行版 (2004年) などの水準を遙かに上回るものがある。

新MEGA最新刊によって明らかになった新事実および研究史への問題提起

新MEGA本巻が公刊された2017年11月28日に, 同巻の編集者でもあるIMES事務局長, G.フープマン氏 (Dr. Gerald Hubmann) は, プレスリリース^{注*)}で, 同書は, 「唯物論的歴史観の生成階梯 („Entstehungsphase der materialistischen Geschichtsauffassung“) 研究への全く新たな地平を切り開く」ことを強調し, この編集によって明らかになった『ドイツ・イデオロギー』成立史上の新事実として, 次の5点を挙げた。

- (1) 国家マルクス主義で規範となった見解は次のようであった(ある)。マルクス/エンゲルスは, 『ドイツ・イデオロギー』において歴史的唯物論を仕上げたのであり, 同時にこの偉大な作品によってマルクス主義とマルクス主義政党の哲学的及び理論的基盤を生み出した。とりわけ歴史的唯物論の基本原則 („Die grundlegenden Leitsätze des historischen Materialismus“) は, ルートヴィヒ・フォイエルバッハの批判のなかで発展させられた。しかし, マルクス/エンゲルスは, この基本的だと誤って理解された作品の出版を断念していた。初公開をめぐるドイツと旧ソ連との競争があった後, ようやく, 1930年代以来, 様々な版本が出回るようになった。第1章「フォイエルバッハ」だけでも, この間, 1ダース近くの版が出現した。版ごとに異なる理由は, 何よりも, 完結した作品である『ドイツ・イデオロギー』が存在しないことにある。そもそも完結した合冊の手稿というものが存在するのではなく, 伝承されているのは, 専ら断片的で既にマルクス/エンゲルスの存命中に所々激しく痛んだ草稿であった。これらの諸々の草稿が, テキスト合成によって, 『ドイツ・イデオロギー』という一つの作品に集成されたのであった。そのさい, 様々な編者がマルクス/エンゲルスによる「歴史的唯物論」の骨格を再

構成しようとして6つの独立した草稿から1つの章、「I.フォイエルバッハ」を構成しようとしたことが、とりわけ記憶に止められる諸々の帰結を生んだ。しかし、この「歴史的唯物論」という概念もまた『ドイツ・イデオロギー』の手稿には存在しないのである。

- (2) マルクス/エンゲルスは、『ドイツ・イデオロギー』の草稿群を書籍という枠組みでは全くなく、彼ら以外の著者（モーゼス・ヘス、ゲオルク・ヴェールト、ヴィリヘルム・ヴァイトリンクほか）も関与する1つの雑誌プロジェクトの枠組みで、起草していた。したがって、その第1の狙いは、**独自の理論的立場を体系的に仕上げるのではなく、その代わりに、青年ヘーゲル派及び同時代の社会主義者との論争を効果的に進めるところにあった。**
- (3) この論争でマルクス/エンゲルスの批判の焦点にあったのは、フォイエルバッハではなく、マックス・シュティルナー、すなわちラジカルな個人主義的著作、『唯一者とその所有』の著者であった。**過去一世紀の読者に第1章「フォイエルバッハ」として提示されていた草稿の大半は、元々はシュティルナー批判の中で執筆されていた。**このことは、「イデオロギー」や「小ブルジョア」などの中心的な諸概念の誕生にも当てはまる。さらに、ここには、ドイツのブルジョア制度や物質的支配に対する精神的支配の諸関係、及び私有財産制度の歴史の発展に関するマルクス/エンゲルスが彼ら独自の立場を表明する多数の脱線も見られる。
- (4) こうした批判をする中で、マルクス/エンゲルスは、初めて彼らの見解を独自の1章で表明し、フォイエルバッハへの批判に結びつけることを決断したのであった。このために、二人は彼らが起草したテキストから、シュティルナーやバウアー批判の中心的なテキストを分離することにしたのであった。本巻では、こうしたテキストの発展がApparatで詳細に記録されている。
- (5) 本巻を通じて、読者が入手できる最大のものは、**20世紀の政治史を背景に、如何にして、未完の、マルクス/エンゲルスの存命中には未公表であった諸々の草稿から、「歴史的唯物論」の一つの基本文献が編み出され得たのかを説明する草稿の伝承史や編集史を含むテキスト批判的な総括及びコメントである。**文献学的研究の成果の中で初めてマルクス/エンゲルスの歴史観の生成及び信頼できるテキスト形成史への完璧な洞察が可能となり、**彼らの歴史観が、天才の理論形成の成果ではなく、3月前期の青年ヘーゲル派や初期社会主義者との論争から生まれたことが明らかとなる。**草稿が証拠立てるのは、後々の受容で喧伝された（およびテキスト編集で示唆された）**歴史的唯物論という1つの哲学を仕上げるのではなく、それに代わって、まさしく「現実的で実証的な科学」のための、この哲学からの明白な決別宣言である。**

フープマン氏に、プレスリリースの翻訳を申し出たところ、上記(1)に注記を付記したテキストが送られてきた。注記は、「**国家マルクス主義…理論的基盤を生み出した**」というセンテンスの末尾に付され、そこでは、「事例を挙げると、この立場は、例えば、モスクワ及びベルリンの[旧引用者]マルクス=レーニン主義研究所によって編集され、これまで広範囲に普及した『ドイツ・イデオロギー』を収録するMEW,Bd.3の序文にお

いて定式化されている」，とあった。

確かに、この注記にあるように、MEW,Bd.3の編集者「序文」は上記(1)の立場を敷衍する。MEW,Bd.3に収録された『ドイツ・イデオロギー』第1巻第2章は「聖ブルーノ」、同第3章は「聖マックス」だが、7ページからなる「序文」における両章への言及は半頁程度であり、大半が第1巻第1章「フォイエルバッハ」の解説に割かれ、フォイエルバッハの唯物論を批判し、歴史的唯物論の革命的な特質、その実践的=批判的性格を称揚している。またMEW,Bd.3の『ドイツ・イデオロギー』第1巻第1章「フォイエルバッハ」は、両研究所の歴史的唯物論の解釈に沿って、原草稿のテキストを約40の断片に分断し—中には、1つの段落を2つに分け、全く異なる頁に配列した箇所もある—並べ替え、同章があたかも統一的なテーマを追求しているかのように編集している。この編集そのものものは、旧MEGA第I部門第5巻の『ドイツ・イデオロギー』を踏襲したもののだが、旧MEGAでは草稿の配列変更は注記等から読み取ることが出来た。しかしMEW,Bd.3にはこの配慮はない。

新MEGA本巻の編集者が提起する最大の問題は、MEW,Bd.3によって世界に流布した『ドイツ・イデオロギー』のこのような編集とその特質理解への根本的な反省である。フープマン氏ら編集者が(1)の批判をMEW,Bd.3対して行った理由は何か。これに答えたのが、(1)の後半から(2)～(4)である。曰く、そもそも、「歴史的唯物論」という概念は『ドイツ・イデオロギー』に存在しないし、『ドイツ・イデオロギー』そのものが未完成であり、書物として、したがってマルクス/エンゲルスに独自の理論的立場を体系化しようとしたものではない。『ドイツ・イデオロギー』は当時ドイツの哲学界を席卷していたシュティルナーやバウアー、また社会主義的諸潮流との論争を目的にした、いわば時論である。この時論から、「歴史的唯物論」で重要な位置を占める「イデオロギー」や「小ブルジョア」などの中心的な諸概念も誕生し、数多の「脱線」から、私有財産制度への言及もなされ、ついには、独自の1章としての「フォイエルバッハ」が生まれ、本論であるバウアー、シュティルナー批判からの分離が「決断」されたのであった。だから、マルクス/エンゲルスの遺稿、第1章「フォイエルバッハ」に関する6点(新MEGA本巻のようにフォイエルバッハに関する手稿の束(*Konvolut zu Feuerbach*))を出自が明確な形に3区分し、最後のメモを独立した草稿に数えると、点数は9点になる)の草稿は、成立の経緯に鑑みれば、これをどのように編集したとしても—新MEGA本巻「解題」の「『ドイツ・イデオロギー』草稿の編集史」では、この試みとして、リャザーノフ版(1926年)、旧MEGA I/5版(1932年)以降の8例が掲げられている。なお、ここでは日本人研究者の試みには言及がない。また研究文献目録にはアジア人研究者の業績は皆無であり、英語圏で最近精力的に発言しているTerrell Carverの業績にも言及はない—、「歴史的唯物論」の体系的展開にはなり得ない。MEW,Bd.3、またこれに連なる一連の研究史は、このことを事実上無視していた、というのである。そして(5)では、「フォイエルバッハ」章の関連諸草稿を、シュティルナー批判との関連で捉え直すことの重要さと、『ドイツ・イデオロギー』という未完の作品が、対象は当時のドイツにおける哲学界での論争批判だが、帰結そのものは**歴史的唯物論**という1つの哲学を仕上げるのではなく、それに代わって、まさしく「**現実的で実証的な科学**」のための、この哲学からの**明白な決別宣言**，であった、というのである。

注*)このプレスリリースの原文は、次の URL からダウンロードできる。

- ① https://www.focus.de/regional/berlin/berlin-brandenburgische-akademie-der-wissenschaften-neu-erschienen-marx-engels-gesamtausgabe-mega-i-abt-bd-5-karl-marx-friedrich-engels-deutsche-ideologie-manuskripte-und-drucke_id_7911553.html
- ② http://mega.bbaw.de/struktur/abteilung_i/i-5-m-e-werke-b7-artikel-b7-entwuerfe.-deutsche-ideologie.-manuskripte-und-drucke.-2017-xii-1894-s.-22-abb.-isbn-978-3-11-048577-6

①は簡略版、②がフルテキストである。簡略版の翻訳は[こちら](#)を、フープマン氏から提供されたフルテキストの全文訳は[こちら](#)を参照。

注**) MEW, Bd.3 は、大月書店版『マルクス=エンゲルス全集』第3巻で全文訳を読むことができる。現在大月書店版『マルクス=エンゲルス全集』は絶版だが、電子版は販売されている。

この問題提起をうけて

IMESが1990年に成立したとき、提唱された新たな目標に、事業の「国際化」と「学術化」＝「脱政治化」があった。後者は、モスクワ及びベルリンの旧マルクス=レーニン主義研究所が編集した新MEGA巻の「序文」(Einleitung)では、収録文献の解説が、しばしばスポンサーでもあった当時の両国政権党の政治的主張に沿っていたことへの深い反省から設定された。フープマン氏のプレスリリースは、このことを最大限考慮したものである。新MEGA編集でこの目標を堅持することの重要性は当然である。しかし、筆者は、(1)の「歴史的唯物論の基本原理は、ルートヴィヒ・フォイエルバッハの批判のなかで発展させられた」ことを否認しているかにも読めるフープマン氏の理解、また「歴史的唯物論」という「概念もまた『ドイツ・イデオロギー』の手稿には存在しない」ことをことさら強調する見解には、俄には与しがたい。筆者はIMESの発足以来、新MEGA事業の「国際化」と「学術化」をフープマン氏らとともに追求し、2005年以後、3巻の新MEGAを世に送り出した^{注*)}。この10年余、筆者は、同学の諸氏と共に、わが国の1960年代半ば以降のMEW, Bd.3 (=旧MEGA第I部門第3巻)の『ドイツ・イデオロギー』編集への厳しい批判とその後の論争を総括し、原草稿と新MEGAのテキストに基づいて、オンライン版の『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォイエルバッハ」編集を進め、今秋にも公開を試みようと考えている^{注**)}。オンライン版に取り組む筆者らには、第1章「フォイエルバッハ」で、当初はバウアー論に属した次の一節とその前後の文脈が極めて興味深い。

「この歴史観は次のことに基づいている。すなわち、それは現実的な生産過程を、しかも直接的生産過程の物質的生産から出発して展開すること、そして、この生産様式と結びつき、それによって生み出された交通形態を、したがって市民社会をそのさまざまな段階において歴史全体の基礎として捉えること、そして、市民社会を国家としてのその行動において示し、かつ宗教、哲学、道徳などと言う意識のすべてのさまざまな理論的な産物と形態を、市民社会から説明し、それらの成立過程をそれから跡づける……。」(新MEGA 本巻、45頁)

確かにここには、「歴史的唯物論」や「唯物論的歴史観」という概念は全く登場しない。しかしこの一節で問題になっている「この歴史観」は、「歴史的唯物論」あるいは

「唯物論的歴史観」ではないのか。第1章「フォイエルバッハ」は、「観念論的歴史観 („Idealistische Geschichtsanschauung“）」に対比させて「この歴史観」を特徴付けているが、ここでは同時に、フォイエルバッハの「唯物論」も徹底した批判の対象となり、フォイエルバッハが「歴史を考慮に入れるかぎりでは、彼は唯物論者ではない。彼の場合には唯物論と歴史とが全く分離している」(新MEGA本巻,26頁)とも断じられている。また両引用文が記された原草稿の右欄にはマルクスの筆跡で「フォイエルバッハ」と記され、「この歴史観」がフォイエルバッハとの対抗をも強く意識して提示されているのが知られる。そして、これらの草稿部分は、構成上はむしろ、実際の執筆時期に照らしても、シュティルナーが本格的に取り上げられる『ドイツ・イデオロギー』第1巻第3章「聖マックス」の記述に先行するバウアー批判の初めの部分に属している。

筆者らがフープマン氏の所説のすべてを直ちに首肯できない所以である。しかし、だからといって、こうした事実関係から、フープマン氏の(2)～(4)の『ドイツ・イデオロギー』の全体的な性格に関わる論点を否定できるというものではない。われわれが取り組むべきはむしろ、新MEGA本巻の文献学的考証の助けを借りて、『ドイツ・イデオロギー』全体の内在的な理解を深化させ、『ドイツ・イデオロギー』全体の中では「脱線」(=岐論)と目された「フォイエルバッハ」に関わる論点をマルクス/エンゲルスが、最終的には、『ドイツ・イデオロギー』の附論扱いにするのではなく、首章=第1章に据えようとした理由を解明することであろう。新MEGA本巻から多大な恩恵を被るわれわれは、この理由の解明を通じて、新段階に入った『ドイツ・イデオロギー』の研究史の前進に貢献すべきであろう。

注*) 新MEG第II部門第12巻(2005年)、第13巻(2008年)、新MEGA第IV部門第14巻(2017年)、参照。

注**) 大村泉/渋谷正/窪俊一編著『新MEGAと「ドイツ・イデオロギー」の現代的探究—廣松版からオンライン版へ—』、八朔社、2015年、及び大村泉「口述筆記説に基づく『ドイツ・イデオロギー』I.Feuerbachのオーサーシップ再考」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第59号、八朔社、2017年7月、17-50頁、参照。

2017年1月15日

大村 泉

東北大学名誉教授・経済学

国際マルクス/エンゲルス財団編集委員